



ひろば

vol. 121

ひとこと

施設長 中島 聖恵

大寒が過ぎて、二月は立春を迎えると暦の上ではもう春です。風はまだまだ冷たいのですが、日差しも明るく、日脚が伸びてきました。

中島鶯の到来も間もなくでしょう。冬木立の紅葉の枝にみかんを刺して、鶯の訪れを今日か明日かと待つのがこの季節の慣わしになっています。鶯の飛来一つとっても、周りの環境の変化を感じさせられます。待つでも待つでも鶯が来ない年がありました。どうしたのかとお隣に伺うと、山の頂上の古墳の整備の為に、木が伐採されたという話を聞いた時はもう愕然としました。鶯はとても敏感です。山から生垣や庭木を伝って下りてくるのですが、その途中の家で造作をされておられた時も我が家まで来てくれませんでした。鶯が訪れてくれた時のあの感激、いつも、つがいに来ます。ヒヨドリを警戒して周りに目を配りながら、せわしげにみかんの汁を啄ばむ姿は、本当に穏やかで平和な空気が周りを包んでいるかのように、その一瞬が私たちの心を幸せにしてくれるのです。あつという間に、ヒヨドリがみかんの皮ごとくわえて取飛び立ってしまいます。自然の中の生存競争は厳しいです。この地は住むのには確かに不便です。ムカデも出ます。蚊も小さい孫には一瞬のうちに顔一面にまぶりつくほどで、半端ではありません。しかし、失われようとする自然と共存するぎりぎりの接点にあることで、唯一鶯が私たちの心を捉えて離さないのです。何とか鶯が今年も来

てくれる自然環境でありますよう願うばかりです。

我が家で鉢植えの花を育てるのは至難の業でした。花に気をかけ、心を掛け、愛情を注ぐ、ましてや花の立場に立って花と心を通わす事は到底無理。過保護に水をやり過ぎたり、そうかと思うと水をやるのを忘れてたりと、花の立場に立つ事など思うことだに難しいことでした。ところが在る時から忙しさは変わらないのですが、鉢植えの胡蝶蘭が芽をぐんぐん伸ばして花を一輪つけました。そして間もなくもう一輪と二つも花が咲きました。嬉しくなつてその鉢を食卓に置き楽しんでいました。次の蕾が咲きません。胡蝶蘭の好きないつもの出窓に移しましたところ、間もなく蕾が二つ開いて皆で四つになりました。植物も自分に最もあった快適な環境を選び、それを用意してやれるかどうかという事です。今また食卓の上で、つやつやとしたグリーンに、純白の可憐な花を四つ咲かせた胡蝶蘭が私たちの目を楽しませてくれます。

鶯の枝に刺したみかんや胡蝶蘭の出窓のように、ロータス桑野が入居者様にとって、その人らしきを出せる生き方が出来る場所、その人にとって一番居心地がよく、活き活きと輝けるところ、人生の主役を演じきるドラマの舞台となる場所。私はそのようなロータス桑野を皆様お一人お一人と一緒に創造していかねたらと願っています。それはとりもなおさず、私の人生を創造することにも繋がると確信するからです。



川柳

「靴」

デザインは 良くても靴は はき心地
胃カメラに 褒められた日の 軽い靴
異人さん 畳の上を 靴で行く
おそくない 残りの余生 靴みがく
靴売り場 目移りばかり 帰ろうか
待つたワ 君の靴音 嬉しくて
鍋に火が 夫の靴を 放り込む
子供靴 おさがり履いて 若返り
黄茶靴 世界を踏んだ 我が足と
お揃いで 靴と鞆が 合コンへ
靴もない 走る喜び 知る私
朝寒く 一人さみしき 無人駅

和夫 久子 晴男 八重子 初音 よしか 美津代 眞由美 厚彦 千里 イツコ 昭三

読者より

救世の夢 豊の初日 去年今年

初苗 両手を合わす 割烹着

育枝 政子

二月の行事予定

一日(水) 一四時 まどかグループ
一〇日(金) 一四時 健康サポート教室
一三日(月) 一四時 押し花
一五日(水) 午前中 写真クラブ
一六日(木) 一四時 川柳「選ぶ」
一八日(土) 一四時 親睦会(ぜんざい)
一九日(日) 午前中 散髪
二一日(火) 一四時 お花
二四日(金) 九時五〇分 買い物
二八日(火) 一四時 食事会(サンマルク)



一月四日
新春ギター演奏会がありました。

2月のお誕生日おめでとう

